九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

シャンピオン版『20世紀文芸雑誌事典』

吉井, 亮雄
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

https://doi.org/10.15017/1495156

出版情報：Stella. 33, pp.329-333, 2014-12-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

《書 評》

シャンピオン版『20 世紀文芸雑誌事典』

吉　井　亮　雄

ある程度広汎な時期・領域を対象とする史的研究が，後世公認の傑作や反響の大きかった文学運動・事件を考察の中心に据えるのは，紙幅の制限や緊密な論述への配慮を思えば致し方のないことである。だがもちろん，どんな作品や事象も時代の流れから完全に隔絶しているわけでない。たとえば『メルキュール・ド・フランス』『新フランス評論』の全号を（とはいかずとも少なくとも数年分を）通覧してみれば，当該誌の編集方針や掲載テクストの傾向が，競合誌との関係・相互影響など，その時々の情況を背景に微妙に変動してゆくことが実感できる。詩や小説，評論・書評のいずれもが著者自身の創意に由来することは言うまでもないが，掲載作品の多くがそういった可変的な文学メディアの影響下で生成・誕生してきたこともまた否定しがたい事実なのである。

『両世界評論』『パリ評論』（ともに 1829 年創刊）をはじめとして，19 世紀以来永きにわたり作家同士の意見交換や流派形成，新人発掘のための重要な場であっただけに，文学史再評価の動向に呼応して文芸雑誌への関心が近年とみに高まっている。また個別作家の「事典」の出版も相次ぐなか，これら 2 つの流れを繋ぐかのように，本年（2014 年）10 月，オノレ・シャンピオン社から『20 世紀文芸雑誌事典』が刊行された[1)]。小稿ではその構成や主立った特徴をかいつまんで紹介したい。

本事典は，フランシュ＝コンテ大学教授ブリュノ・キュラトロの指揮の下に 120 余名の研究者が分担執筆した，総頁数 1,354，採録雑誌数 355 にのぼる 2 巻本の大著である。編者のキュラトロは 1980 年代から文芸雑誌に注目してきた研究者で，すでに何冊かの関連著書を世に問うているが，なかでも 2002 年に上梓した『20 世紀の文芸雑誌』（ブルゴーニュ大学教授ジャック・ポワリエとの共編著）は本事典のプロトタイプと位置づけられよう[2)]。

まずは編纂の基本方針をキュラトロの「序言」に沿って要約しよう――。20世紀はとりわけ多数の文芸雑誌が発刊された時期であるだけに，すべてを網羅することは不可能事に近い。重要な雑誌にも，また認知度の低い雑誌にもそれに見合う位置を与えることを目指すが，採録の有無はある程度分担執筆者の自由裁量に委ねた。このため，たとえば『アンタンシオン』や『テル・ケル』のように，すでに充実した個別研究が存在するものについては彼らの判断で立項しない場合も出てくる[3)]。また文芸雑誌をあつかう既存のウェブサイトに参照を委ねることで，対象から外すことも少なくない。その結果，知名度や発行期間の長短に比すれば記述の量や方法に不均衡な点も生じようが，研究者・作家がまず関心を寄せるのがより小さな雑誌であるという事実を優先し，画一的な編纂は斥けた。なお発行地にかんしては，フランスに最大の紙幅を割くことは言うまでもないが，ケベックや地中海沿岸のフランス語圏，スイス・ロマンド，ワロニアなどの諸地域も採録の対象とする。

次いでキュラトロは，「雑誌」を「周期が理想的には月刊，場合によっては季刊や年2回の刊行」と規定し（しかし実際には月2回発行の『メルキュール・ド・フランス』〔ただし1904年までは月刊〕や『ラ・ルヴュ・ユニヴェルセル』〔1920–1944年〕など，規定外の採録も少なくない），「日刊や週刊，時事性の強い不定期刊などのプレス」とは区別する（発行期間が長く影響力もそれなりに大きかったにもかかわらず『ラ・ルヴュ・エブドマデール』〔1892-1939年〕が落ちるのは，まさに週刊の故なのや否や）。また20世紀後半以降に多く誕生する個別作家の「会報」の類も除外。そのうえで「文芸雑誌」をその掲載内容にしたがい次の3つに分類している――

- 創作，評論，書評（時に「他雑誌閲覧（ルヴュ・デ・ルヴュ）」を含む），および『新フランス評論』や『ヨーロッパ』『レ・タン・モデルヌ』のような各種の欄（リュブリック）
- 創作のみ，またはそれに時評をくわえたもの。たとえば『風の怒り（リール・デ・ヴァン）』『ポエジー』
- 文学理論（場合によっては関連書の書評欄も）。たとえば『クリティック』『小説のアトリエ』

以上のような編纂方針にしたがい作成された本事典について，まずはその公刊を慶賀したい。大部なうえに内容も多岐にわたるので，全体の出来栄えを評価するには実際に手にとり繙いていただくほかないが，とりあえずいくつかの点に絞ってごく簡略な補説をくわえよう。

編者の方針説明にあったように，各項目の記述内容は分担執筆者の判断に委ねられているが，次のような構成となる場合が多い。すなわち，創刊者の紹介，発刊にいたる経緯，刊行期間，主要な編集メンバーや寄稿者の列挙，掲載テクストの傾向とその推移・変動，同時代文学への影響，競合誌との関係・交流などである。大半の項目には簡略な参考文献欄として，当該誌に直接関連する研究書・論文数点のレフェランスが添えられている。各々の記述量は編者が序言で断るほど特段不均衡なものとは思われない。たしかに 1 頁強から 10 頁前後までと幅はあるが，雑誌の重要度や刊行期間の長短におおむね対応していよう（たとえば，誰しもが 20 世紀最大の文芸雑誌と認める『新フランス評論』の場合は，16 頁とさすがに大きな紙幅を与えられ，書誌にも特例的に 30 冊ほどの単行書が並んでいる）。

第 1 次大戦前に比較的長期間にわたり刊行された雑誌のいくつかをサンプルとして記述内容を検討してみると，『レルミタージュ』や『ロクシダン』『詩と散文』などのそれはいずれも均衡がとれ，各誌の特徴を巧みに描き出しているが，いっぽうジャン・ロワイエールが主宰した『ラ・ファランジュ』の項目は，掲載テクストの紹介は充実しているものの，雑誌全体の位置づけにやや不満が残る。大雑把な言い方にはなるが，結局のところ出来・不出来は当該誌にかんする分担執筆者の知識や捉え方の如何に依るところが大きいようだ。

なお対象時期は一応 20 世紀に限定されているが，例外も若干数ある。ピエール・ルイスが主宰した『法螺貝（ラ・コンク）』（1891–92 年），プルーストも参加・寄稿した『饗宴（ル・バンケ）』（1892–93 年），ヴェラーレンやメーテルランクが編集陣に加わったベルギーの『ル・コック・ルージュ』（1895–97 年）など，19 世紀末に発行され新世紀を迎えることなく終刊した文芸雑誌がいくつか含まれているのがそれだ。象徴派を中心に「世紀末」文学に関心をもつ者にとってはありがたい措置である。ミシェル・デコーダンの記念碑的著作『象徴主義的価値の危機』によって大要は知られているが[4]，1890 年前後から第 1 次大戦までの 4 半世紀は仏白文学交流が史上最も盛んであっただけに，さらに『若きベルギー』（1881–97 年）やアルベール・モッケル主宰の『ラ・ワロニー』（1886–92 年）など，同時期のベルギー雑誌がもう少し採録されていればと思うのは欲張りすぎというものか[5]。

本事典の功績・存在意義は十分に認めたうえで，いくつかの不備も指摘しておこう――。まず気にかかるのは，参照のさいの操作性が必ずしも好くはない

という点である。原因は主に次の2つからなる。第一は，欄外標題（ランニングタイトル）が雑誌名の最初のアルファベットしか掲げていないこと。前述のように各項の記述は長いもので10頁以上に及ぶ。このため実際の参照のさいには，欄外標題にしたがい巻を割り，まずは近辺の数頁をめくって太字斜体の見出しを探す。次いでそれとの前後・遠近関係の見当をつけながら，さらに頁繰りを続けて求める雑誌へたどりつくという具合である。たとえば «L» の欄外標題だけでも第1巻から第2巻に跨がり550頁強も続くだけに，これに要する手間は決して無視できない。各頁の記述に対応する雑誌名を欄外に表記するだけで難なく解決できたのにと，大いに惜しまれるところだ。

操作性の悪さの因をなす第二は，雑誌名が定冠詞（L', La, Le, Les）で始まるものはすべて «L» の項目に入れている点である（上述のように同項の頁数が図抜けて多いのもそのため）。これ自体は本事典が売り物のひとつとするところで，キュラトロによれば，標題の冠詞は創刊者の意図を反映したひとつの「文学的価値」であり，しばしば「雑誌の詩的射程」さえも証言するだけに重視・尊重すべきである。まさに然り。しかし，だからといって項目配列にまで反映させる必要がはたしてあるだろうか。多くの書簡集や文学史的著作の索引がそうするように，冠詞は見出しの末尾に括弧に入れて示すだけで事足りたのではないか。ある雑誌を探そうとして，まず冠詞で始まる項目を探し，そこに無ければ冠詞を外したかたちで引き直す（あるいはその逆の手順）。第一の難点も禍して，参照作業は二度手間，三度手間となりかねない。しかも残念なことに，編者・分担執筆者による冠詞の有無確認もけっして無謬ではない。たとえば『パリ評論』や前衛的な文芸・芸術誌として名高い『白色評論』は冠詞なしとして分類・配列されるが，両誌とも実際の標題には各号一貫して定冠詞が付されているのだ[6)]。

編者自身が断っていたように，すでに個別研究が存在するものについては立項されない場合がある。だが，その取捨は時としてあまりにも恣意的すぎるのではないか。顕著な例を挙げれば，時期をほぼ同じくし，ともに汎欧を標榜した2つの雑誌，『コメルス』（1924-32年）と『ジュネーヴ評論』（1920-1930年）。いずれも大部な研究書が公刊されているが[7)]，項目として前者は採られ後者は捨てられる。その採否の基準が筆者にはどうにも判じがたい。いくら研究者がより小さな雑誌に関心を払うものだとはいえ，これら重要度の高いものについ

ては，同時代の文学環境の見取り図を示すという意味でも，先行研究の有無を問わず可能なかぎり収録すべきだったのではあるまいか。

また上述のように，各項目の末尾には簡略な参考文献欄が付されるが，分担執筆者の判断によりこれを欠くものもある。それだけになおのこと，既知の情報はウェブサイトに委ね，巻末書誌をいっさい省くという編集方針については大いに疑問が残る（それらのサイトは愛好家など個人の運営によるものが多く，いつ活動を停止してしまうか分からない）。じっさい第２巻末に付されたのが，分担執筆者・採録雑誌のアルファベット順一覧をのぞけば人名索引だけというのはいかにも寂しい。「事典」と銘打つかぎりは，やはり複数項目にわたる書誌・索引を備えるべきであろう。既刊の各種関連書・論文にかんする情報提供はむろんのこと，たとえば創刊年順の一覧や，大手誌の歴代編集陣の名簿など，独自の工夫を施すこともできたのではあるまいか。

さて，以上あれこれと注文を付けはしたが，本事典がその該当時期・領域を対象とする実証的・文学史的研究推進の呼び水となることは疑えない。必然的に早晩，19 世紀に重点をおく同種事典への期待とともに，本事典自体のいっそうの充実，増補改訂をのぞむ声も高まってこよう。

註

1）*Dictionnaire des revues littéraires au XXe siècle. Domaine français.* Sous la direction de Bruno CURATOLO, Paris : Honoré Champion, coll. « Dictionnaires & références », 2014, 2 vol., 1,354 pp.

2）Voir *Les Revues littéraires au XXe siècle.* Textes rassemblés par Bruno CURATOLO et Jacques POIRIER, Dijon : Centre de recherche Le texte et l'édition, coll. « Le texte et l'édition », 2002, 254 pp.

3）キュラトロは名指していないが，次の２著がその個別的研究―― Béatrice MOUSLI, *« Intentions ». Histoire d'une revue littéraire des années vingt*, Paris : Ent'revues, 1995 ; Philippe FOREST, *Histoire de « Tel Quel » (1960-1982)*, Paris : Éd. du Seuil, coll. « Fiction & Cie », 1995.

4）Voir Michel DÉCAUDIN, *La Crise des valeurs symbolistes. Vingt ans de poésie française (1895-1914)*, Toulouse : Privat, 1960.

5）ちなみにベルギーのフランス語文芸雑誌にかんしては，次の便覧が簡明にして有用である―― Paul ARON et Pierre-Yves SOUCY, *Les Revues littéraires belges de*

langue française de 1830 à nos jours [éd. revue et augmentée], Bruxelles : Éd. Labor, coll. « Archives du futur », 1998.

6）『白色評論』にかんする浩瀚な著書をものしたポール＝アンリ・ブールリエも，なぜか記述全般にわたり同誌名の定冠詞を無視している（voir Paul-Henri BOURRELIER, *La « Revue Blanche ». Une génération dans l'engagement, 1890-1905*, Paris : Fayard, 2007）。ちなみに各紙誌標題の冠詞の有無にかんし筆者が最も信頼をおくのはフランス国立図書館の蔵書目録である。

7）Voir Sophie LEVIE, *Commerce, 1924-1932. Une revue internationale moderniste*, Rome : Fondazione Camillo Caetani, coll. « Studi et documenti d'archivio », 1989 ; Ève RABATÉ, *La Revue « Commerce ». L'esprit « classique moderne » (1924-1932)*, Paris : Classiques Garnier, coll. « Études de littérature des XXe et XXIe siècles », 2012 ; Jean-Pierre MEYLAN, *« La Revue de Genève ». Miroir des lettres européennes, 1920-1930*, Genève : Libr. Droz, 1969 ; Landry CHARRIER, *« La Revue de Genève », les relations franco-allemandes et l'idée d'Europe unie (1920-1925)*, Genève : Slatkine Érudition, 2009.